高校生の学習場面における資料活用と支援方法の実態と課題

小山　結紀

2022 年度から高等学校で始まった「総合的な探究の時間」では、情報や情報手段を主体的に選択し活用できる学習が行われることが求められている。一方で調べ学習は探究学習の前提であると指摘されており、その成果にテーマ理解が求められることから、まず調べ学習のテーマ理解を促す情報手段の選択・活用への支援方法を明らかにする必要がある。しかし、図書館サービスの中で学習者の資料選択を支援した方法は明らかになっていない。また、文部科学省が示す指導体制から、教員・学校司書・司書教諭を「直接の指導者」と定義した。

本研究の目的は、学習者が調べ学習のテーマ理解を促進する資料を、主体的に選択できるようになるための支援方法を明らかにすることである。第 1 の研究課題は高校生を対象に、調べ学習のテーマ理解度が高いグループ(以下、A)と低いグループ(以下、B)で資料選択の特徴を明らかにすることだ。第 2 の研究課題は高校生を対象に、各グループの支援方法の使用の実態、評価や課題を明らかにすることである。前者は実験、後者は調査によって検討した。

石井（2023）を参考に、まず 15 世紀から 19 世紀前半の人物ごとに世界史探究の教科書の索引及び肖像画の登場回数を調査し、10 名を調べ学習のテーマに設定した。次に、雑誌『学校図書館』の調べ学習に関する報告を調査し、調査対象とする支援方法を決定した。

第 1 の研究課題では、A 高等学校に研究協力を依頼し 7 名の高校 1 年生(以下、学習者)を対象に実験を行った。学習者はまず調べ学習のテーマに設定した 10 名の歴史上の人物から調べたことがない人物を選択し、その人物について資料の情報、探した方法、わかったことをワークシートに記述しながら調べた(30 分)。その後調べたことのまとめをワークシートに記述した(10 分)。まとめを分析した結果、A に属する生徒は 5 名、B に属する生徒は 2 名だった。A は複数の方法を用いて資料を探し、最初に調べた概要に登場した単語を次に調べる方法を行う特徴があった。B は調べた内容につながりがないという特徴が明らかになった。

第 2 の研究課題では、2 つの調査を実施した。支援方法の課題の調査は実験の直後に行ったため参加者は 7 名であった。結果として、A・B 共に資料の特徴を明確にするための支援方法がニーズであることが明らかになった。また B は、調べる計画を立てるための支援方法が求められていた。また、後日調査として支援方法の評価の調査を行い、回答を回収できたのは 6 名であった。その結果、A は情報により速くアクセスするための支援方法を高く評価したことに対して B は、「直接の指導者」による対面で行われる支援方法を高く評価した。

以上の結果から、テーマ理解を促す資料選択方法として、情報収集の最初に学習テーマの概要を幅広く調べ、登場したキーワードについて様々な方法を組み合わせて資料を探す方法が重要であると考えられる。また、支援方法の課題としては、調べ学習の計画段階のための支援方法をより充実させることが必要である。

（指導教員　鈴木 佳苗）